進歩は出來ぬ。富める者が金を出すばかりでなく力ある者腕ある者識ある者各々その持てるものを捧げて社會の向上を謀らねばならぬ。これが改造の根本になるのである。（文責記者　神戸幼稚園保姆志賀スエ）

我園の一日（一）

さきに、各地の幼稚園に、ある一日の保育の有りのまゝをお知らせ下さる樣にお願ひ致しました處、御多忙にも拘らず、皆樣より極めて有益ある御返事を頂きました、御寄稿の全部を掲げて新春の本誌を飾りたいと存じました處、非常の多數にのぼり、到底一同につくす事は出來ませんので、已むを得ず本號には僅にその中の二つ三つを御紹介申上ぐる事にとゞめ、尙、二月號は特に「我園の一日」のために本誌の紙面を充分にあてたいと思つて居ります。遠く滿州、朝鮮、臺灣のはてまでも、その保育振りを坐ながらにして拜見する事の出來ますのは、誠に興味深い事と存じます。尙、御多用中、お返事下さいました方に厚く御禮申上ます、（編輯係）

＝次第不同＝

○

名古屋
松若幼稚園　石田馥

我園は、緣深い苔滑かな奥まつた、普通民家を借り受け、大正六年菊の香薫る、十月二十三日開園いたし茲に二、三年を重ねてまゐりました。

此の間、如何にせば、幼兒のあらゆる欲求に滿足させることが出來得るやと、苦心を致したが、何分不完全な設備では思ふ樣にもならず、たゞ古く出來た石垣を圍んだ、七八十坪の庭が活動の中心場所でありまして、ほんの草木が眞の玩具眞の友達眞の敎育者でありました。されば、いつまでもこの小さい建物に滿足してゐる譯にはゆかず、大膽にも本年七月、南へ二丁離れた所に、園舍建設の工を起しました。

月は變り九月下旬園舍は、北側一棟（保育室五、保姆室小使室附添室便所玄關北南廊下）、が出來上りました、長い休みに、あき〳〵た、幼兒を收容し保育をし始めました。しかし、（遊戯室兼會堂）の大建物や、（園長住宅）、の建築工事が盛んに行はれてありますから、運動場には用材が山の如く積んでありますので、これ

から危險の虞あるを以て、今年中は庭へ出さぬ事と致しました。
床は全部、衞生、經濟を鑑み、コルク、板を張りやゝ家庭式に建て、幼兒の活動に便ならしむる樣につとめました。現今八十餘名の幼兒、保姆五名です、因みに舊佛陀會園の名を改稱し、宗祖親鸞聖人、の御幼名松若丸の、御名を戴き松若幼稚園と致しました。左に本園日誌の中より、秋の一日をぬき、御紹介致します。

秋の一日

明方より降り出した雨は、おやみなく、寒い朝の町を潤してゐる。
高下駄穿いてコトコトコトと、元氣よく入つて來る幼兒は、當番の保姆に、(始業一時間前出勤)迎へられ、包み切れぬ嬉さを、兩の頰に漂はせ、「先生おはやう」、とすがりついては廣い部屋へ走つてゆく。
丁先生、女兒のか弱さを勞つて、ソロ〳〵と歩を揃はせて入り來らる。母親にすがつて今朝買て貰つたと言ぬ許りの、白々しき雨傘を嬉しさうにさして來る、名札の墨もまだ乾かぬ位であつた。
次から次へと幼兒や先生が入つて來られる、お迎の先生。傘や下駄のお世話で中々忙かしかつた。
舊園舍時代雨ふりといへば、半數は缺席したがこゝに移つてから、其率が增えて晴天の時と餘り變らぬ樣之は未だ木々香はしい園舍に憧れてか又今週の製作品が綜合的になつて居るので、子供ながらも結果を樂しんで來るのであらうか。
いつしか時も移り、幼兒等は先生の、「おならび」の聲に各室の前に集り、廊下の洗面所に於て、手を洗ひ淸め、極めて靜かなる、マーチにつれ禮拜室に入る。
形よき馬蹄形は作られ手には赤き念珠、黑き念珠がかゝつてゐる室の窓硝子は靜かに閉められた。
佛壇の前の雪白の布は、左右に開かれ淸らかな、みあかしは和かい光を放つ。沈香の煙細く立ちてゆかしき薰は室內に滿ちた。
尊い鍮……の音に園長の勤行(主事保姆合唱)……はては我等の寸時も忘れることの出來ないところの、

陛下　の御聖旨敎育勅語の奉讀が終る、此間僅に三分、緊張せる氣分は室內に漲つてゐる。これより釋尊の內觀法により、兩手を膝に瞑目すること二分、全く人無きが如く只、念味をつまぐる音の聞ゆるのみ。

園長は溫い音量で「皆さんをいつも可愛がつて下さる方は佛樣である。わたし共は佛樣と同じい心でお友樣を可愛がりませう。こうして幼稚園へ來るといつの間にかよい心になるのです」、と

あゝこうして尊い法衣の姿に接し淨かな音を聞いて、どうして惡い心が出やうか……。

もはや念珠は手より手に送られ先生の手によつて仕まはれた。

輕快なるマーチは足がろく幼兒を各室に送り出した、各室に於て梅の打拔を一ヶ月出席表に貼る、(單に樂しみの意)。

活動を生命とする幼兒は、思ひ〳〵の欲求にそれからそれへと飛びまはり、霽れ上つた南廊下の日當りよき自然階には芋蟲の樣に、ゴロ〳〵と繪本を餘念なく見てゐる。

男兒が凧の遊戯を熱心にやつてゐる、K先生は口で調子を取つてゐられる、いつの間にか鏡の前は髮結場となつてゐる、手の爪や足の爪を切つて貰ふてゐるのを參觀してゐる兒もあつた。

かくして樂しい時間は續けられて行く。

「おならび」と誰かゞ云ふと、おならびの御用意々々々々と意味もない言葉をいひふらし、それが又都合よく鈴のの代用になつて、ちやんと先生がその前に立たねばならぬ樣になるのであつた。

一の組は先頃、郊外保育を八事山に催せし時、途中眼に映じた秋の景色を想ひ出し、今週の製作品となさしめた、八ッ切の畫用紙に褶紙貼紙縫取にて電車、案山子、を作り其背景に稻穗と鳴子を圖畫(隨意畫)により表はしめた、鳴子の音に驚いてバット群れ立つ雀も亦自由に貼らした、之はすでに早朝より室內に掲けられた、模範物により皆よく受け取つてゐた。

智力の進んだ兒同士を四五人づゝ相互的に、小さいサークルを作らせ、やゝ劣つた同士は六七人まとめてこゝには先生專ら誘導の任にあたつておられる、机の上には紙、針糸、糊、鋏、鉛筆が置かれてある、各組

二十人弱の數でいつも分割保育同樣にゆつたり行かれてゐる。
踊れ〳〵と無邪氣に踊る幼兒や、奏樂につれんとて苦心するいたけいな兒もあつて、こゝは遊戯の部室であつた。
美しい六つの珠を手にして「コレ紅葉の色ですか」と質ねる兒や「先生おはかまの色」、「僕のオベ」といふもつきぬ遊びを繰り返し「ヨイヤサ〳〵フレベル先生の六つの球は」とさかしく歌ひ出した年少者もあつたが、こゝは六球遊びであつた。
時計の針は十一時半を示した、一同晝食の準備をしかかつた、手洗も出來た、之よりキチンと凡て用意が出來たので、慈悲深いみ佛に感謝する意で、小さい手は合掌された。保姆が「お召り」といへば幼兒「いただきます」といふ、箸はいつしか口に運れおいしく一粒のこさず戴いた。口嗽も出來た。
積木室には建築場より運ばれた大きな木切れが山の樣に積んである、男兒は、はやくも洋館、飛行機、水雷艇、燈臺、などゝ複雜なる組立にて、大模型を作りあげられた。
「大人がどうして〳〵　こんな物が」と先生がいはれると、「先生見て下さい」と汽車を運ばせてゐるのもあつた、女兒は優しく部屋の隅で、お人形事、家事、「私女中よ」、お父さんは誰？といふ…　其他すきつぷ、かけあし、元氣に時の移るも知らで遊び狂うた。
大工左官の活動を熱心に見守つて壁泥の中に足を落したので、大騒ぎが起つた、
もうお歸りの時刻となつた。又おならびと一同集つて、うれしい〳〵行進や遊戯が始まつた其中先頭はいつの間にか馬蹄形を造らせ朝の如く、靜かに眼はとぢられ細い小さい和かいねむれ〳〵の曲が聞えた、開いた眼は又も佛前に注がれ終りの禮拜が靜かに出來た。
玄關先や、門先に、送り出して、恙なく歸宅せよと、祈る心の保姆は始めて、我身に歸つた。
（一一・二一）

○ 大連市北公園幼兒運動場　坂井ふで

保育の一日を、記すに先ち、いさゝか當方の位置、設備幼兒服裝等につき、記して、御參考に、致したいと思ひます。

位置＝大連市の北東の一小區域を、俗に露西亞町と稱し、日本橋（橋下に南滿鐵道走る）を隔てゝ、町部と連つて居ります、此處に、山城町、兒玉町、北大山通、乃木町、濱町の五町名があります、幼兒の大方は、此中から來ます。幼兒運動場は、北大山通りの電車線路に沿うた邊にあります。

公園と申しても、僅十萬坪のアカシヤ樹林に、過ぎません、一丁先は電車の終點で、其處が、芝罘通ひの船の着く、ジャンク波止場です。冬はずつと結氷してしまひ、其處から、吹いて來る風は、それは〳〵冷いのです。幼兒の多くは、北に向つて、來ますわけですから、どんなに、勇氣を出して、來ますかゞ、幾分お解りになる事と存じます。

設備＝主なる建物は僅五十坪餘で、玄關が三坪、廊下が二坪、物入が一坪半、女中部屋が二坪、廊下を隔てて右に十五坪の保育室と、左に三十坪の遊戯室兼保育室があります。其廊下から、バラック建の、炊事場、携帶品置場、便所等に行かれます。

（イ）三十坪の室は、南北西に十六ケの二重ガラス窓があつて、其中北西の十ケだけ、バテで目張をしてしまひ、僅三ケの小窓を殘しておきます。南の六ケは其儘にしておきます。又此室に、置ペチカと申す煖房具を、四ケ備へ付け木格子の圍を致します。シーソー、滑り臺等も此處へ備へ付けますのですが、今年は、まだ付けません。

（ロ）十五坪の保育室には東南に、六ケの窓があつて、東側の三ケだけ目張りをなし、ダルマ形大ストーブと、置ペチカ、各一ケを備へ付けます。

（ハ）炊事場は五坪弱で、目張りをします。竈とダルマ形小ストーブとありますので溫です。此處に、水

槽があつて微溫湯を滿し、下の手洗流しに五十倍のリゾール液を備へておきます。
又五十人分入の辨當溫めもあります。

(二) 便所には作り付のベチカの、大きなのが、ありますから、暖です、手洗は微溫湯を滿しておきます
猶以上の煖房具には何れも二ケ、又は三ケの水入場があつて、不斷に水蒸氣を立てゝ空氣の乾燥を防いで居ります。

幼兒服裝。洋服三分ノ一弱で、他は和服です。大方ジャケツ、メリヤス、眞綿等を下に着込み、上を簡略にして居ります。靴下はスコッチか、太毛糸製で、さもない者は、二重に穿いて居ります、足袋ですと、コールテン、又はカバー付です防寒帽を、冠つた上に、毛皮付のマントを着し、寒い日には、更にマントの頭巾を冠り、衿をしめ、手袋をはめ、防寒靴を穿つを常としますが、中には、手袋なきもの、學生帽のものズボン下と、足袋との間に、赤身を二寸も、出し居るものカシミヤの靴下だけの者等もありますこれは、何處の家でも家の内は暖いので遂うつかり、自分だけ承知して、飛び出して、來るからもあります。

出席狀況。非常に寒い日には、學校も、交番も、辻等に、旗を掲げて、臨時休業しますので、幼兒もそんな時は勿論休みます、それ程でなくとも、今日はと思ふ日には、家庭の意嚮で休ませても、一向構はぬ事とし、子供の健康を第一要件としてこちらからも、休場を、進める事もあります。時間も、只今は、九時から午後二時迄ですけれども、これも、大體で、十一時頃、來る者もあります。

晩秋の一日

氣溫。外C 7°、火氣なき廊下 九時 正午 F 34°30°、室内 九時 正午 二時 F 56°65°55°、朝起きて見ると、窓硝子は、一面に芭蕉林のやうな、美しい、結晶を、つけて居り、滿洲獨特の、寒風が、巷より巷に、梢より梢に、吹き捲くつて居る、子供等の通場を思ひ遣つて、八時少し過ぎに行つて見ると、もう、二人の助手と七八人の子供とが、來て居て

元氣よく、玄關に、出迎へて呉れる。見ると何れの顏にも、「寒さになんか負けるものか」といひたい誇らしさが、あらはれて居る、僕なんか防寒帽だけで、マントなんか、着ないんだ」、「だつて風引いたらだめですね」等と口々にいふ、それ等に、取り卷かれて、カバーの足に、やつと上草履を、引つかけ、持ち物を、所定の場處に、收めて手を清める。S子さんは「あら私、手を洗ふのを、忘れた」と思ひ付いて、洗ふ。Y助手は、家庭に女手が多いので、何時も早い。今日も八時前に來られて、玄關に立ち、集つて來る一人〳〵に手傳つて、マントを脱がせたり、辨當を肩からはづしてやつたり、泣きさうにして來た者には力付けたり、元氣よく語る者に、合槌打つたりして居ると、Kさんが、平常の滑稽な持前も何處へやら、甚しく御粗末な顏して泣いて來る。Y助手は、赤い其手を摩擦してやり乍ら、「偉らうございましたね、よく此處迄來られました、「到々來られたんですから、泣くのは、およしなさい。」といつて、微溫湯で手を洗はせ、大きな室の溫度の低い處に入れ、やがて、小い室の、暖い處で、遊ばせた。H助手は、最前から、Sさん、Jさん、Pさん等と南滿鐵道を敷設して居る。積木の數、千個弱、線の延長、三間餘。驛あり、鐵橋あり、電柱あり、シグナルあり、右より來るは、最新式のデカボットといふ汽罐車で、客車、有蓋貨車、無蓋貨車の混合列車で、長春から來たさうな。又左の方から、出て來たのは、窓が皆開いで居つて、これはミカド式の汽罐車で、埠頭から船客を乘せて來たさうな。シリンダーにする物を頂戴といふから、箸環の箸を渡す。番號が要るから、何か下さいといふのでH助手が、暦の上の數字を切り拔かせて、貼らせる。滿鐵の徽章が要るの驛名を英語で書いて下さいの、人形を欲しいのと、種々の註文が出て來る、助手も、幼兒も、大車輪で、大働き。Mさんは、飯事用の十能で、炊事場から石炭を持つて來て汽罐車に滿す。其傍に吾不關焉と、IMさんが繪本に見入つて居る。SH子さん等女兒が、摺紙でHさんから、あやめの摺み方を、傳習中。更に玄關へ行つて見ると、火の氣の無いかはり日光の豐な此處では、NTさん、NTさんMJさん等、一の組の元氣者揃ひで、大積木、小積木樣々取り變ぜて、大連神社の建築中。既に社と石段と二つの華表とが出來て居る。自分の顏を見るとMJさんが、華表の上の額を書いて呉れと頼みます。長方體の積木に合せて、紙を切らしめそれに太

々と大連神社と書いてやると、拜みに來いと案内が來る。TR子さん等三四の子供と共にお參りする、賽錢箱迄出て居る。試に拜む言葉を、聞いて見ると、KHさんは、「お菓子を下さい」と言つて拜むと、眞面目になつて敎へて呉れる。とEさんが、「ちがひます、丈夫になるやうにつて拜むんです」と打ち消してしまふ。大方KHさんは、參拜の時貰ふ御供物の事を思ひ出したのではあるまいか、と思つて問ひ返して見たがもう何とも答へない。Kさんは、「さうぢやない、世界中の子供が、皆死ぬやうにつて拜むんだよ」と反對を、言つて例の滑稽の調子になつて居る。Eさんは敎へられた通りに、愼んで白す。他の幼兒等も變る〳〵拜む、YTさんが太鼓を、持ち出して來て傘立に垂して打つて見たがどうもうまく鳴らないと首をひねつて居るから、「傘立の上に上げて、打つたら」と、注意すると今度はよく響いたので大喜び。櫓太鼓の話をして聞かせる太鼓につれて、Kさん、NTさん等が、御神樂をはじめる。老成人然たる新入のMTといふ小さい子供も、兩手をポケットに突き入れたまゝぢつと見入つて、につこり笑つて居る。

遊戯室では、玄關を切り上げたY助手相手に、鞠當て鬼ごつこで大騷ぎ、S子さん、R子さん、KSさん、SMさん等が、ペチカの蔭やピアノの下に隱れたり、飛び出したり、會集用花椅子を飛び越えたり、伏さつたり、起きたりして、本當に面白さう。何れも注意深い眼を四方に配り、スリッパも何も脱いで手に握つたまゝ息をハア〳〵はづませて居る、其大騷ぎの傍には二つの組立積木を出して、工夫に餘念なき者もある縫取板に斜線を入れたり、格子を縫つたりして居る者もある。何にもしないのは、JR子さん唯一人、やがて十時半頃にもなると、誰いふともなしにお始まりにしませう〳〵との聲が聞えて來たので、汽車と大連神社とを殘させ、他の玩具を方付けたり、身邊を整へたりして、會集する事にする。全部集るまで、二三人の歌ふに合せて、風車や、雛子の歌を彈いてやつて、皆でうたふ。雛子の歌は大分うろ覺えだつたので、口で云つては節に合せ〳〵しましたから、よく意味がわかつたと見えて、終り頃には皆可愛らしい氣分になつてしまふ。今日は四十六人に對してやつと二十九人の出席であつたが、自分ではよくこんなに來られたと感心した。

會集と言つても、特別な事をするのでなく、今迄思ひ思ひに遊んで居つたのが、一つ輪になつて、一つ心にしばしなるといふ迄です、今日はお約束の勇吉さんのお話といふ催促なので其話をする。非常に喜ぶ。何かうたふつもりでピアノに向つたが、皆「勇吉さんの汽車よ止まれ」と、信號する眞似をするので、早速其遊びに取り掛る。椅子と大積木とで鐵橋が出來、雨、勇吉、父、客、煙突、前燈、笛、石炭等の役割が出來、汽車が組立てられると、助手の驛長さんの合圖で進行し初める、雨は降る、橋は落ちる、勇吉は前掛を脱ぎて打ち振りつゝ、父に信號する、汽車は止り、人々は其身の無事を喜ぶ。こんな事を數回した後、數日前から日課のやうにして居る、お角力をしやうといふ事になり、ズック製の疊を六枚、皆で擔ぎ出して、腹式呼吸して、負けても泣かない誓ひの禮をなし、保姆の呼出しで始まる、各人の姓に山とか川とかつけて呼んでやる。大概力を見計らつて取り組ませるので、投げられてもさういたくない。二巡の後、今日は勝つた人に誰でも飛び掛る。飛び込角力（私が勝手につけた名で本當の名は存じません）をさせた。皆熱中して上着を脱ぎ、羽織を脱ぐ騒ぎ、もうこれで十一時半過ぎてしまふ、小さい人々より順次整容含嗽して、お辨當を持つて食卓に着く。大きな子供は、疊を片付け、整容し含嗽する間に女中とボーイとが、床を濕る棒雑巾で拭ひ清め、食堂となる。（此間に當番の保姆、又は助手は手技材料を用意しおくを常とします）此日は、粘土をする約束であつたのでその用意が出來て居る、一同着席後「頂きます」と挨拶して話し乍ら食事する。十分間位から、一時間位の差で食べ終るのでどうしても、子供に無理が行くが他に室も無いので何か靜に遊べる材料を與へる事にする。食事をおへた子供は、含嗽をなし食器を洗つて藏ひ、奇麗に拭はれた机の上で各自由に製作に取り掛る。思想無き者には扁平體に穴を穿たせ、豆粕でも作らせやうかとの豫定であつたが、これは無駄な心配に過ぎなかつた。一人が錘の形を作つて見せに來たので、何ぞと尋ねたが本人にもわからぬらしいで一寸兩端に手を入れたら、「アッ鳩になつた」と大喜び、それや今朝の雛子の歌等から暗示を得たのか、大分鳥類が多かつた。ヒゴの足を四本もつけて敎へられたり、餌を食べたり木に止つたり、羽を擴げて飛んだりして居るのがあつた。角力の光景をそつくり作つたのや、鰐を粘土板大に作つて、鱗片迄も畫きて得意な

のや、時計を作つて數字の記入を求めるものや、茶巾絞りや、三角皿や、梨の實作りに夢中なのもある。

二の組はと見ると立派な汽罐車や、軍艦や、達磨や、栗等が出來たとて、飛び廻つて喜んで居る。やがて製作物を飾り棚に、道具や手は、手洗場で清め、荒れ性の子供だけにベルッ水をつけてやる、此間に一度手を膝にして食事の濟んだ禮があつた。

又自由遊びとなり、一部分は小積木で、汽車よ止まれの景を作り、一部分は椅子で、猫の家を作りKさんを猫にして、毬の紐を長くしたのを投げては、猫に拾はせ、猫が逃げると捕へるために追ひ廻し、これを繰り返して居る、其傍に防寒帽を冠つた一隊は飛行將校なさうで、輪投の臺を倒にしてハンドルとなし、實體鏡を以て、四方を窺ひ、粘土の時計で、時を計つて飛んだり降りたり、人を乘せたり、機械を檢めたりして居る。シングルベルスにて、馬車を作り、人を乘せて埠頭に、市場に、驛に走り廻るもあり、徑八寸の大毬當てをして、汗になるもの、獨樂廻しに一生懸命なもの、計數器の下に座してジャンケンで玉の出し合ひをして居る者などであつた。二時といふ時間に制限され、惜しみ乍ら歸る支度して順次挨拶して歸つて行つた。

（一一・二七）

岡山市
出石幼稚園
山崎照惠

○晩秋の一日

一、幼兒登園を迎ふ。

二、室內整頓に次いで本日新に設られし植木棚に植木の鉢を洗ひて並べたり。

三、分團生活に入る。時に九時過ぎなり。

イ、此子に特に此事をせしめんと立案して保姆が作りしもの（本日は畫き方をなす）

ロ、材料のみを定めて幼兒に選ばしめしもの（二種とす）

風　車　此れは二三日前より寒さ加はりて幼兒の活動衰へし爲めに與へたり。

お菓子……數日前には特に與へし材料なるも今日まで盛になすものなりければ準備したり。

ハ、純自由に幼兒の要求に應じたるもの

砂遊び、お菓子　人形、戰爭事其他

四、食事、十一月中旬より分割を試みつゝあり其目的は（豐なる氣分にて食事を終らせ度き爲なり）

五、再び分團の生活に入る

イ、午前中より續きしもの。

ロ、午前中活動少なかりしものを主とし活動せしむる目的にて共同遊戯をなす。

此れをも分團的に試みたり

六、服裝を整へて歸途につかしむ。

幼兒大多數午前中は風車にて非常に面白く活動し午後は靜かにお菓子を作り居たり（紙細工）本日特に保姆の感じたるは三のイに於ける場合、昨日園外に遊びし其時の寺の境内全體を非常な興味を以て描き保姆の要求せる公孫樹も地面も極めて巧に極めて自然に發表せし事なりき。此れによりて幼兒の心の發達は誠に合理的にして「吾人より見たる幼兒」には誤り多き事を切に感ず。（一一・二八）

○園外保育の一日

神戸市　清風幼稚園

午前九時全幼兒を運動場に集め髪の亂れたるもの顔、手、足の不潔なものを調べそれ〳〵整容をなさしめ

後二十分間後會集をしました。十時から十二時まで大倉山公園で園外保育いたしました。丁度陸軍大演習中ていくつも飛行機が空を飛び幼兒は大喜びで一齊に飛行機の唱歌を謠ひながらとび廻りました。歸園後手を洗はせて食事に歸しました、午後は石盤に畫を描かせました皆飛行機でした。二時からトラホーム患者だけ園醫の診察所へ連れて行きました。缺席幼兒は八十七名中只一名。（一一・一三）

附記　本園は後進部落に設立されました小學校入學前其準備のため一ヶ年間保育をいたします特殊の幼稚園で保育の仕方も一般と多少異つた點があります。

○我園の一日

東京本郷區誠之幼稚園　小向喜美

○「先生、お早うございます」。

×「先生、先生、今日は僕の方が勝ちました」。

△「先生、今日の朝幼稚園に來る道で、校長先生におひ(逢)ました。」

先「おひましたてはないでせう。逢ひましたでせう。お上手にお辭儀が出來ましたか。」

小使「先生、今、節子さんが、御門の處で、お姉樣の袖をつかまへて、泣いて入らつしやいます。お姉樣は學校が遲れるので、困つて入つしいます。」

受持先生　聞くよりも　急ぎ走せ行く　門の外　やがて抱き來る　節子さん　鼻と涙で　其顏は　目もあてられず　かたはらで　つく〳〵樣子　眺むれば　凡はそれと　知られたり　先はばかりと　さゝやけば　先生さてはと　合點がほ　不淨の場所に　つれ行きぬ　やがて用すみ　出で來るを　見れば不思議や　こはいかに　先の樣子は　夏の日の夕立過ぎし　如くにていつもの通り　にこ〳〵と　可愛ゆき聲を　はりあげて

節「先生、お早うございます。」

かくさま〳〵の　出來事の　うちに時計は　進み行き　九時も半ばを　過ぎぬれば　やがて合
圖の　鈴の音　チリン〳〵〳〵　廊下に部屋に　おのがじし　遊びゐたりし　おさなごは
右往左往に　定めたる　己が室へと　かけてゆく　しばしが程は　なか〳〵に　騒しかりき
其うちに　靜まりければ　先生は
「おはばかりに行きたい方、行つていらつしやい、かけ出さないで」
駈けいだすなの　ひとことは　何のきゝめも　あらばこそ　我を先にと　かけて行く　やがて
事すみ　先生に　引つれられて　會集の　室に集へる　有樣は　小さき折に　押しつめしお
すしのそれに　さも似たり　ぎやう〳〵づめの　其中に　不平も云はず　大人しく　朝の挨拶
深呼吸　寒さ凌ぎの　體操も　皆よく揃ひ　ほめられて　今は寒さも　どこへやらいと嬉しげ
に　騒ぎ合ふ　しばし憩ひて　或は歌　或は遊戯と　それ〳〵に　ことなるわざに　取かゝ
る　まもなく自由　あそびとて　追々繰だす　庭のおも　手狹なれども　さま〳〵に　遊び
戯れ　語り合ふ　心の底も　隔なく　いと廣々と　見えにけり

庭遊び

晴渡る　小春日和の　庭は今　自由の遊び　はじまれり　今ぞ大事と　先生は　耳を引立て
眼を見はり　おもてはたはれ　遊べども　心の内は油斷なく　子供の一言　一行を　保育の料
にあてんとて　少しの隙も　あらばこそ　やがて駈け來る　太郎さん
太郎「先生、きのふ、僕の兄樣の御法事で、幼稚園をお休みしました。先生今度僕の御法事の時入らつしやい。
ご馳走がありますよ。（法事の何物たるを母は敎へざりしか）
そこへにこ〳〵花子さん。
花子「先生、先生、うちの母樣（かあさま）はネー、うそをおつきになりますよ」。

先生「そんな事はありません。それはあなたの思ひ違ひでせう。」
花子「いゝえ、本當です。この間ネ、私がよく、お留守番をした時、いゝ兒だから、日曜には、何處かへ連れて行つてあげますよ。つて云ひながら、まだ、何處へも連れて行つて下さいません。」
先生「それは、お母樣が、何か御用があつたからでせう。今にきつと連れて行つて下さいますよ。」（苦しき辯護にて、あとは話頭を轉ず）

おでんば孃の　はね子さん　縄を引ずり　駈けて來て
羽子「先生、縄飛びの縄を廻して下さい。」
みよ子「先生、入れて下さい。」（縄飛組に加入申込）
きよ子「先生からして下さい。」
一郎「逆まはしが、いゝんです。」
はるか彼方の　砂場では
○「先生、大きなトンネルが出來ました。早く入らつしやい。」
×「先生、お團子が出來ました。どうぞ召あがつて下さい。」
松子「先生、ひとが、おまゝごとをしてゐると、杉山さんだの、三郎さんが邪魔に來て、お道具を、めちやめちやに蹴飛ばして、其のゴザの上で、お角力を取つてゐます。」

あまり事件の　大きさに　駈けつけ見れば　こはいかに　あまた集る　ちび力士　組んづ轉んづ　ゴザの上　いまは勝負の　もなかなる　見ればお膳もお茶碗も　右と左にはねとんで　修羅の巷と　なりにけり　むげにとむるも　氣の毒と　しばしたゆとふ　かたはらに　何故叱らぬと　云ひたげに　此方をにらむ　松子さん　やがて勝負の　つきければ　こゝぞと先生進み出で

先生「杉山さん、人のこまる事や、いやがる事はよしませう、さあ松子さんに、ごめんなさいをなさい。」

杉山「ごめんなさい。」（頭を下ぐ）
角士達「失敬〳〵〳〵。」
先生「お詫をなすつたら、機嫌を直して、堪忍してあげて下さいネー。」
得心顔に　松子さん　あなたこなたに　亂れ散る　膳椀拾ひ　集め來て　また始まりぬ　お
まゝごと
○「先生、鬼ごつこをしませう。」
□「先生、競爭をしますから、用意ドンを云つて下さい。」

食　事

先生「お辨當にしますから、お手を洗つていらつしやい。」
皆それ〳〵に　手を清め　食事の卓に　打向ふ
先生「お仕度が出來ましたか。それでは、ご飯に致しませう。」
一同「頂きます——。」
とる手遲しと　おさなごの　箸もて口に　運び居る　食事のさまぞ　まじめなる
先生「おすみになつたら、お含嗽しませう。」
程なくすみて　食休み　獨樂を持出す　ものもあり　繪本折紙　すき〳〵の　遊にしばし
餘念なし
生「サアお庭に出て遊びませう。」
聞くより早く　もて遊ぶ　玩具をもとの　引出しに　納めて庭に　下りたてば　元氣百倍
くさ〳〵の　遊はつくる　時もなし　ほどをはかりて　振る鈴に　遲れまけじと　我が室へ
皆一同に　かけて入る

先生「さあ、けふは折紙のお細工をしませう。今日は、福助さんですよ。」

一歩〳〵と　すゝみ行く　福助さんの　折方も　皆よく會得　したりけん　忽見ごと出來上る

先生「お迎が見えたからお歸りにしませう。さあ、マントを着せてあげませう。大きい方はお友達同士着せ合せをしてご覽なさい。」

仕度揃へば　引連れて　又も集る　遊戯室　ご機嫌ようの　挨拶も　一しほ力　加はりて

いさみにいさみ　待ちわぶる　母の許へと　歸り行く　足の運びも　かろげなり。（一二・五）

朝鮮京城私立新龍山幼稚園　永延琴

○初冬の一日

今年は例年になき暖かさで、餘程凌ぎようございますが、やはり午前中は寒さ酷しく、十時に會集致しました。男子三十五名、女子三十二名出席致しましたが、會集の時は、皆寒さうでした。第二時間の談話（小雀の土産）の時は、皆元氣づいて、話もよく聽きました。十一時半に食事。「ホーラお畫になりました」の唱歌も、元氣よく歌ひ、午後から、スキップやら遊戯やらで、二時に、皆、今日の寒さも忘れて樂しく我が家に歸りました。（一二・三）

奈良女子高等師範附屬幼稚園　會津カダエ

○晩秋の幼稚園（日誌の一節）

霜月もはや名殘りを告げやうとする二十六日、けふはお當番なので、早き起きて、外を見るに、空は晴れ

て一點の雲もない、明の明星は靜かに下界を照して居る。手早く仕度して早朝より出勤、幼兒の登園を迎へた。八時頃より幼兒は三々五々登園する。もう此の頃では迎へをして貰ふ幼兒は年少組の數人にすぎないやうになつた。今日は天氣のせいなのか。幼兒等は何れも喜色滿面、一人として不嫌機な顏つきをして居る者はない。持參した諸物品の所定の場所に納めるやいなや男の兒は將校用の赤襟を肩に木劍を腰に、紅白の旗を打ち振つて勇ましい戰さごつこを始める。女の子は砂場に粉屋さんをするもあり、人形を抱きあるくもあり、ケンケンバイに餘念ないのもある。木馬や手押車や陸上ボートや鞦韆のきしる音は絶え間なくひびく。九時の定刻には鈴の音で一堂に集り「先生ォ早ウ」「皆サンオ早ウ」の朝の挨拶をした。一、二の組は幼兒の望にまかせ、校外保育をする事にした。他の組は各保育堂にかへりてお稽古やお遊びをするのである。今日は天氣はよし、風はなし、晩秋の氣を充分に味ははしめるのに誂へ向きの天候であると思つた。それでその目的で春日野方面へと導いた。幼兒は只もう無中になつて喜んで居る。美しく色づいた紅葉を拾つては「テンテン天滿ノ紅葉」と敎ふるものもあり、銀杏を手にしては「アー蝶々〳〵」と飛ばせて見るものあり、又中央に赤丸を貼つて日の丸の扇を作るもある、「イッチン、カッチン、ホーソノ實」「先生イッチンハ食べられますネー」と尋ねるもあり「一ッ二ッ三ッ四ッアーこんな處に隱れて居るわ」と草の間より拾ひ出すものもある。寂しく咲き殘つた尾花の中にわけ入つて何か探して居るものもある。元氣な男の兒はこゝにても戰爭ごつこ、木に攀ぢ登るもの、小丘を昇降するもの、木ぎれを鐵砲にズトン〳〵とうち出すもの、又側の小川のほとりには田螺や小蟹をさがし出して興がるもの何れも皆とりどりの遊びをして居る。天は高く氣は清く暖かい日光はこの笑み樂しめる兒等の頭上をさも撫でるが如く照して居る。げに秋の野山に遊ぶは大自然の懷に入るの思がする。かしこの林に親と子と引き添つてねむつて居る鹿の姿も見える。

名殘はつきねど時は刻々に移つて行く晝食の都合もあれば十一時過歸途についた、帝室博物館の北手をすぎ武德殿の前を通つて右に折て歸園したのは正午近くであつた。晝食の用意はもう出來て居る。幼兒の採集した紅葉や尾花やりんどう等花瓶に挿させ、手洗ひ用意させ「サアサアオ晝ニナリマシタ……」の合唱終

つて「イタダキマス」、「オアガリナサイ」、一同は今日の樂しさを思ひ浮べつつうれしく食事をする。食後はいつもしばし室内にとどまらせ皆の食事の終るのを待合はさせかた〳〵繪本を見せ又は積木、畫き方、或は摺み方等自分の好きのものをさせる。又この間に色色な問答をする。午後は室内にのこるものは一人もない、皆外に出て活動して居る。自分も外に出でて彼等の遊びを打守つて居ると一兒「先生僕二百匁増えました」、「僕三分大きくなりました、もうおき先生位になれますネー」と意氣揚々。「先生私看護婦サン」と見れば胸には菊花の勳章を掛けてゐる、剪り方で作つたものらしい。又一人「先生明るいでせう」とさし出すを見れば長柄のついた小さな提灯。彼等は保姆に見せることを又なきものに喜んで居るらしい。歩を轉じてこちらに來て見ると共同ペンチで自働車や電車を造つたり陸上ボートに椅子を組み合せては兵舎をつくつたり砂場では大人の思ひも及ぼぬ大仕掛の築庭をつくつて居る、「トンネル」も二つ三つ出來て居る「先生見て頂戴」幼兒等は先生に見てもらふのが何よりの樂しみらしい。小山の彼方では女の兒の六七人蓆をしいて飯事を始めてゐる。裏の池では木の葉船を浮べてよろこんで居る。どちらを見てもこちらを見ても樂しい天地である。「チンチンチリリン」あゝ名殘多い今日の終鈴、幼兒等はめい〳〵で諸道具一切を片付けた。身のまはりを整へて一堂に集り「先生サ樣ナラ御キゲンヤウ」とお歸りの挨拶をした。彼等は小さい赤表紙の通信簿を肩にかけいつもの樣に手に手をとつて元氣よく園門を出て行つた。

あゝ今日もまた幸多い一日を送つた。（一一・二六）